

研究助成 研究成果報告書（HP掲載用）

研究課題名：母親のヘルスリテラシーと幼児の食習慣との関連についてのコホート研究

実践女子大学大学院 生活科学研究科 公衆衛生学研究室

羽入田 彩花

【研究要旨】

本研究では、幼児が望ましい食習慣を確立することを目指す健康教育の立案に資するために、乳児期の母親のヘルスリテラシー（HL）の高さが、幼児の望ましい食習慣・生活習慣に与える影響を検討した。その結果、乳児期の母親のHLの高さは、幼児期の摂食嚥下機能の発達に寄与することが明らかになった。摂食嚥下機能の発達は食習慣と密接に関わることから、乳児期より前に健康教育を行い母親のHLを高めることは、幼児期の望ましい食習慣の確立に寄与する可能性が考えられる。

【研究目的】

乳幼児健康診査（健診）は受診率が95%以上と極めて高く、地域の健康状態に関する悉皆調査と考えることができる。そこで、乳幼児健診で得られる情報を活用して、乳児期の母親のHLが幼児の食習慣・生活習慣に与える影響を明らかにすることで、幼児が望ましい食習慣を確立することを目指す健康教育の立案に資することを本研究の目的とした。

【研究方法】

対象者は、2019年12月～2020年2月にA県の10市町で3～4か月児健診（4m）を受診し、2020～2021年度に同一市町で1歳6か月児健診（18m）を受診した児916人とその母親である。4mで把握した母親のHLと18mの市町共通の間診項目で把握した幼児の食習慣・生活習慣を解析に用いた。母親のHLはIshikawaらが開発した一般市民向けの伝達的・批判的HL尺度で評価し、五分位数を用いて、LHL（第1五分位数未満）・MHL（第1五分位数以上～第4五分位数以下）・HHL（第4五分位数超）の3階層に区分した。幼児の食習慣・生活習慣は、保健指導の観点から望ましい習慣と望ましくない習慣の2水準に区分した。母親のHLと幼児の食習慣・生活習慣との関連は、Cochran-Armitage（CA）検定で評価した。CA検定の結果が $P<0.1$ である幼児の食習慣・生活習慣の項目を従属変数、母親のHLを独立変数、対象者の基本特性を調整変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。従属変数の対照カテゴリは望ましくない習慣とし、独立変数の対照カテゴリはMHLとした。すべての解析は有意水準を5%未満に

設定した。

【研究結果】

「食物を咀嚼不十分に丸のみをしないこと」は、母親の HL の高さとは有意な関連を示した (CA 検定、 $P<0.001$)。さらに、母親の HL が高いことが、対象者の基本特性を調整しても「食物を咀嚼不十分に丸のみをしないこと」と有意な正の関連を示した。本研究で検討したその他の幼児の食習慣・生活習慣に関する項目は、母親の HL と有意な関連を示さなかった。

【考察】

生後 5~6 か月頃までの乳児は、乳児型嚥下により乳汁を摂取する。その後、児の成長に伴い原始反射が消失し、3 歳頃までに随意運動による摂食嚥下機能を獲得する。このように、摂食嚥下機能は後天的に獲得するため、児の成長発達に合わせた適切な支援が必要である。本研究では、乳児期の母親の HL が高いことは、幼児期の望ましい摂食嚥下機能の獲得と有意な正の関連を示した。この結果は、HL が高い母親は、幼児の摂食嚥下機能の発達のために適切な支援を行えることを示唆している。摂食嚥下機能の発達には食習慣と密接に関わることから、乳児期より前に健康教育を行い母親の HL を高めることは、幼児期の望ましい食習慣の確立に寄与する可能性が考えられる。

【結論】

乳児期の母親の HL の高さは、幼児の摂食嚥下機能の発達に寄与する。